

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自 己	外 部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所して3年目を迎え、入居者様や職員の顔を地域の方に知って頂くことが出来ました。新しい職員は増えましたが、開所と変わらない職員でいられるのは職員満足につながっているように思います。	毎朝、2ユニット合同での朝礼時に法人の経営理念を唱和し理解を深めている。ホーム独自のスローガンは廊下に掲示し来訪者にもわかりやすくなっており、職員は具体的なケアの実践に活かしている。理念にそぐわない言動が職員に見られた時はホーム長が個人面談をして話し合うようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎月1回の行事へ参加はお休みすることなく継続。また町内から季節行事のお誘いがあり、お花見、流しそうめん、そば打ち、餅つきなど積極的に参加し地域の一員として交流している。	常会に加入して会費を納めている。月1回公民館で開催される集いには5~6名の利用者が参加し、夏祭りなどの季節の行事には全員が参加して地域の方達との交流を深めている。歌、手品などのボランティアの来訪が定期的により楽しまれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度福祉避難所としてグループホームを登録手配中。地域包括と協力して地域の方へ認知症の理解や支援について勉強会を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1度会議を行っている。ご家族の参加もあり施設での生活スタイルを報告することで、日常生活全般が見えてくるため、地域の方や包括からアドバイスを頂きサービスの向上に活かしている。参加したご家族からはお手紙でなくそのまま聞けるためとても良いと好評。	年6回奇数月に開催している。メンバーは家族代表、町会長、公民館長、民生委員、地域内の他事業所管理者、地域の契約薬局責任者、地域包括支援センター職員で、利用者の状況や行事報告等により日常生活全般を知って頂くことができ参加者からも活発に意見が出される。そうした中から地域との関係も深まりサービス向上につながられている。更に、消防署、交番等にも参加の声かけをしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	松本市での規則や徹底などはSNSを通じて確認、また運営推進会議で出た意見などの相談など、ご協力して頂いている。	市担当者とはSNSで確認したり報告等は訪問時にしている。介護相談員も4月から月1回2名来訪されて利用者とは話をされ、何かあれば意見を頂き運営に活かしている。また、市の花いっぱい運動の一環として高齢者福祉交流も含めて当ホームでフラワーアレンジメント教室が開かれることになり、利用者が参加する予定になっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在身体拘束はなし。としているが、今後の課題はある。年3~4回職員へ勉強会を行い、意識付けを行っている。	玄関は開錠されていてセンサーで知らせるようになっている。外出傾向の強い方は数名おられるが、センサーの音がすると職員はすぐに行き制止することなく見守りながらついていくようにしている。所在確認は日に6回行っている。夜間転倒防止のため、家族了解のもとにセンサーマット使用の方がいる。年3回、課題を含めて身体拘束をしないケアのための勉強会を行い認識を高めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年数回の勉強会にて職員へ周知。虐待の種類など知らなくて行ってしまうことがないように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	知識をつけるため、管理者は年1回行われる松塩地域の勉強会へ参加している。職員へ周知については今後の課題である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には契約書を購読しているが、その際はゆっくり丁寧に読むことを心掛けている。またご家族からの質問にはわかりやすく説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関にご意見箱は設置しているが、直接要望やご意見を頂くことが多い。ご家族参加の行事にはアンケートを送付し要望を伺っている。すぐできることから反映させている。	殆どの利用者が意思表示でき、職員もできるだけ時間をかけて話しかけることにより思いを受け止めている。家族の来訪は毎日から年に1回と様々だが、その日の担当職員が家族に日頃の様子を報告して意見を聞くようにしている。家族会は年2回、食事を囲んで行われ、半数近くの出席があり交流を深めたり、意見を頂く場となっている。また、月1回の便りとともに個人の近況がわかる写真を送ることで利用者の様子がわかりやすくなっており家族からも喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回全体会議を行い、業務改善や職員の提案など意見交換する場を設けている。また出席できない職員はノートへ記録し主任が発表し意見を求めている。	月1回、全体会議を開き本社会議の伝達、業務改善等の検討を行っている。全体で集まり話すことで互いの関係も密になり意見交換も活発で運営に反映させている。欠席した場合は議事録で確認して意見も求められている。目標管理による人事考課制度があり、年2回、ホーム長による個人面談があり日頃のケアについても話ができている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度があり、職員一人ひとりのレベルに合わせた項目にて評価を行っている。賞与には環境整備・新聞購読などの手当が支給。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	長野県きやりネットから毎年数名研修へ参加を進めている。また喀痰吸引研修は1～2名推薦、資格取得を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	岡田地区には多数の施設があり、運営推進会議へ参加をしているため、各施設の行事にもお誘い頂き参加交流する機会を作っている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人と面談する機会を設けている。その際困っていることや出来ることを伺い、職員と一緒に出来るよう配慮し関係を作っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約前には必ず見学へ来て頂き、施設の説明を行っている。その際家族が困っていることを聞き出し協力体制がとれるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面談時には出来る限り、その人に合ったサービスを見極め、相談援助を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の手続き記憶を元に職員が合わせて対応を心掛けている。昔から習慣で行っていたことを共に支援しながら生活をしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	必要に応じてご家族様と連絡を取り、情報を共有して共に支えていく関係を築けるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域のイベントに積極的に参加しドライブ等で馴染みのある場所を訪れることで人や場所との関係が途切れないよう努めている。	家族から情報を得ている友人・知人・兄弟の来訪があり、楽しく過ごされている。利用者の希望する馴染みの場所(通っていた温泉等)にドライブで出かけ、自宅に立ち寄ると隣家の方が出てきて楽しく話をすることもあり、関係が途切れないように支援している。年賀状が届く方は数名で、家族・職員が返事を代筆している。ホーム入居後に利用者間での新たな関係も自然にできている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様同士の人間関係を把握し、自然な関係でお互いが支え合えるように配慮支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご家族様のご厚意で夏祭りのお手伝いに来ていただきました。またボランティアの訪問(オカリナ)も行っています。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者様の暮らしの希望・意向を日々の生活でお聞きしている。また生活歴を活用しご家族様の助言や本人の行動などを把握に努めている。	殆どの利用者は意向を表出できている。職員は生活歴を基に希望に沿って「じゃあ、行きましょうか」と声をかけながら自己決定ができるように取り組んでいる。気持ちを受け止めて、実行できるような支援を心がけている。つぶやきは記録に残し情報を共有化している。洗い物など、できなかったことも毎日繰り返しやることで身体が思い出し、またできるようになることがあり、思い出して能力を引き出すことにも職員が取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者様の生活環境をご家族へお聞きし、本人が現在出来ることを見極め支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日血圧・熱・表情などを観察し記録している。時間に囚われず、一人ひとりのペースに職員が合わせている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の暮らしの場で本人の笑顔をより引き出すことが私たちの役割と念頭に入れ、職員同士で話し合う機会を設けている。意見交換した上で計画へ反映している。	職員1人が1~2名の利用者を担当し、生活全般から精神面のケアまで支援している。気付いたことは「気付きノート」に記録して、それを基に職員同士で話し合い、半年に1回計画作成担当者が家族の意見も踏まえて介護計画の見直しをしている。状態に変化が見られた時は随時、見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録の他に担当者へ向けた工夫や改善方法などを記入するノートを作成した。担当以外に職員の気づきがわかり反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	職員が自宅と同じ目線で日々対応することで、入居者の希望に沿った支援が行えている。社会資源を活用しすぐに対応できるように努めている。		

グループホーム岡田松岡

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣のお店へご本人が必要とする好みの物品を選択し購入できる支援を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に1度～2度かかりつけ医が往診へ来られ、状態報告を行い共有に努めている。日々の生活の中で相談が出来常に連絡が取れる体制を作っている。	利用前のかかりつけ医を継続している方は若干名で、毎月往診を受けている。ホーム協力医を受診される方も若干名で家族が対応している。残りの方達は往診できるホーム近くの医療機関に変更されている。その日の担当職員が往診時の対応をして情報を共有している。介護職員の中に看護師が1名おり、日常の健康管理から緊急時はオンコールを受け対応されている。薬に関しては近くの契約薬局で一括管理ができています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常における状態の変化を察知し、記録、申し送りにて看護師を含め全職員が情報共有できるようにしている。必要に応じて受診、往診時に報告。緊急を要する場合は看護師と連携(オンコール)		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関、病院関係者との連携出来ておらず、入退院時の情報不足。退院時の状態を早めに収集し職員が周知出来ることが課題である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に家族へ重度化、終末期の意向の確認をしているが、日々状態の変化が見られるため意向の再確認が必要である。また、主治医の意向とそれに合わせた事業所の対応を明確にすることが今後課題である。	利用契約時に重度化に係るホームの指針を説明して、看取りについての事前確認書を頂いている。状態の変化に応じて再確認しながら家族の希望に沿った支援ができるように主治医の意向を含めたホームの対応・体制を整えている。看取りの経験はないが、職員は勉強会を重ねて直前までの支援ができるように備えている。喀痰吸引研修を受けて現在5名の職員が資格を取得している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを掲示。定期的に勉強会を行い急変や事故に備え、ご家族様、主治医との連携を図っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回防災訓練実施。1回は地域の方と一緒に行うようになっている。また1回は夜間を想定した訓練を行っている。地域の方から福祉避難所として要望があったが、今後の課題。	年2回、消防署員が参加して防災訓練を実施している。火事、夜間を想定してそれぞれ行った。職員は先ず利用者を玄関まで誘導して避難させて居室ドアに確認済みの札をかけている。職員の緊急連絡網はLINEで一斉に行っている。地域防災訓練には利用者も参加して簡易ベッドや非常食の体験をしている。水・食糧などの備蓄は2週間分ある。地域の福祉避難所登録し、災害時に要介護者と認められた方を介護者と共に受け入れるようにしているが運用については今後の課題としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者様の言葉に耳を傾け、人生の先輩という念を持ち、教わる気持ちで言葉遣いに配慮した対応を心掛けている。	苗字に「さん」付けでお呼びしている。居室に入る時はノックと声掛けをしている。言葉遣いにも配慮して「ダメ」等、吐き捨てるような表現は避けて尊厳の気持ちを忘れずに接している。職員はトイレ誘導時もそっと言葉をかけたりにこやかな表情で話しかけたりしており、笑顔で応じている利用者の姿が見られた。尊厳に関する研修も行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者様が自己決定できるよう、お茶の時間など自ら選べるよう工夫している。また入浴時の洋服も選んでいただくよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者様一人一人、昔からの習慣を維持しながら過ごして頂けるよう配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時には着替える洋服を本人に選んで頂いている。自ら選べない方はいくつかの選択方式で取り組んでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と一緒に作ることで、食事に対する関心を持って頂いている。片付けについては開所時から自ら行うよう配慮し習慣化されている。	全員が箸を使って自力で食事ができている。食形態はおかゆ・きざみ食の方が数名いる。食材委託業者と契約して献立からバランスの良い食材まで提供されている。盛付け、食器洗い等のお手伝いは毎日、担当を決めて利用者が積極的に役割を果たしている。正月等は特別食が提供され、敬老会、誕生日等のホームの行事食として寿司、ウナギ等の希望を取り入れ、おやつも手作りして楽しんでいる。ホームの畑では夏野菜を収穫し近所からの差し入れもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食材委託業者と契約をしているため、365日のメニュー・カロリーがわかり栄養バランスが保たれている。水分は自由にお茶が飲めるよう配慮、取られない方にはジュースなどで工夫し提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きを行っている。義歯のある方は毎夕食後洗浄剤を用いて消毒をし清潔保持に努めている。		

グループホーム岡田松岡

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	紙オムツから布パンツへ変更する取り組みを行っている。排泄時間を記録し、声かけにて失禁の回数を減らしていくことで、自然に排泄が出来るよう支援へつなげている。	自立されている方が15名で、そのうち布パンでパットも使用しない方が12名、リハビリパンツの方が3名、残りの3名の方が一部介助となっている。入居時は失禁状態でも職員が根気よく声かけ、誘導を続けると3ヶ月位で効果があり、リハビリパンツの使用が減ってくるという。職員は自分たちが努力することで改善できることはやろうと自立に向けた支援に取り組んでいる。利用者も家族もうれしく思っているという。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の工夫を行っている。夏にはスイカやかき氷アイスなど栄養と一緒に水分を取ることで排便の手助けを心掛けている。また適度な運動や散歩も取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は週に2回と決めてしまっているが、いつでも入浴が出来るよう毎日機会を設けている。一人一人入るタイミングや時間を合わせ、楽しみとして季節湯も実施している。	自立の方、二人介助が必要な方ともに若干名ずつとなっている。あとの方は見守りを含めて一部介助で入浴されている。入浴日は週2日であるが金曜日以外は毎日入浴できる環境にあり希望に応じている。拒む方には職員が工夫して声かけをしたり、中には演歌を流してムード作りをすることもするという。職員と共に近くの温泉に出かけるかたもあり、ゆず湯・リンゴ湯等も楽しまれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人のリズムを崩さぬよう職員がその人に合わせた生活が送れるよう配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬の副作用が不明の場合は薬剤師へ確認し処方した日に指導を受けている。また変更があった場合は情報を共有し再度確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の得意なことを把握し家事全般自ら行えるよう配慮している。また季節に合わせた行事を行い気分転換となるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	玄関には鍵をかけず、自由に入出入りができるように配慮している。また近隣の美容院の協力があり気軽に通えるよう努めている。	外出される時は車いす対応が3名、杖使用が3名、後の方達は自立している。日常的にはホーム周囲の散歩、ゴミ出しも職員付き添いで交代で出かけ気分転換をする機会となっている。行事外出として花見や紅葉狩りなど、季節に合わせて出かけている。また、市内の名所や希望の地をドライブで楽しまれている。玄関下駄箱には利用者の下足がわかりやすく置かれて自由に外出している様子が窺えた。	

グループホーム岡田松岡

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少数の方は消耗品等買い物へ行きたいと希望があるが、他の方はお金を使うことがほとんどないため見直しが必要。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方の家族は週1ペースで電話がくるが、他の方は電話でのやり取りが全くない。季節に合わせてお便りなどは工夫し職員と一緒に作成し送ることがある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物の構造上、廊下が暗いイメージだが、入居者様自ら飾りを作り壁に貼っている。季節の花などを取り入れ目で見えて楽しめる工夫を行っている。	玄関フロアは広く使いやすい。廊下の壁には絵画や利用者の作品が飾られて明るい雰囲気となっている。リビング兼食堂には季節の花や鉢が置かれ、また週刊誌等書籍コーナーがあり自由に見ることができる。廊下の数ヶ所にソファがあり利用者同士が仲良く話している場面が見られた。炬燵のある和室があり、夜、寝つけない方は炬燵で足を温めて休まっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下の隅にソファや椅子を置き、お話ができる空間を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に居室に何も置いていないと不安を招くため、自宅で使っていたものをそのまま持参して頂き居心地の良い環境となるよう配慮している。	居室入り口には大きな文字の表札がある。室内には洗面台と可動式クローゼットが完備されている。自宅で使い慣れたタンスや机、いすを持ち込まれ自由に配置して思い思いの生活空間を作っている。壁に自分の作品を飾ったりして居心地の良さに配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人の手続き記録を元に、入居者様が生きがいと思えるよう職員は見極めて行動しているが今後の課題ともいえる。		